

## 平成 29 年度学内研究助成 成果報告書

### ① 報告者所属・氏名

生活科学部 現代生活学科・須賀由紀子

### ② 事業名

高大連携のアクティブ・ラーニング

### ③ 事業の目的

高大連携によるアクティブ・ラーニングのプログラムを他大学と連携して行い、学生の学修力の向上を目指す。

### ④ 事業実績・研究成果（具体的に）

#### 【事業概要】

大学生と高校生がともに学び合う「高大連携」のプログラムを、大学生が企画し、運営を行う。高校生にとっては、大学の学びの一端を知り、高校から大学、そして社会へとつながる学びのイメージを持つことができる。一方、大学生にとっては、「社会とつながる学び」を実感し、自分自身の日頃の学びに対する理解を深め、主体的に学修を進める動機づけとすることができる。また、プログラムの企画および運営の経験の中で、協働力・コミュニケーション力、判断力・行動力など、現代に必要なコンピテンシー力を高めることができ、これからの時代への対応力を培うことができる。

このような主旨のもと、日野市をフィールドワーク地として、他大学と連携して地域理解のための高大連携プログラム開発に取り組み、大学生の学修効果について検証した。

#### 【事業実績】

##### 1. 高大連携プログラムの実際

■プログラム名「高大連携 2017 サマーキャンプ in 日野」

■実施日：2017年8月3日（木）～8月5日（土）

■場所：八王子大学セミナーハウス 及び 日野市豊田駅周辺エリア（フィールドワーク）

■テーマ：大学の授業を感じよう！！

～高大連携「まちづくり」について学ぼう～

■内容：

日野市豊田駅周辺エリアの自然環境及び生活環境を調査し、その結果をもとに、若者からまちづくりへの提言を行う。

■プログラム構成：

1日目（8/3）：フィールドワークに向けての事前準備 @八王子大学セミナーハウス

2日目（8/4）：フィールドワークの実施 @日野市カワセミハウスを拠点 ※

まとめ作業・プレゼン準備

3日目（8/5）：各班まとめプレゼン・講評 @八王子大学セミナーハウス

■フィールドワークの概要

・テーマ「市民と君とでバッテリー ～高校生から投げかけるまちづくり提案～」

- ・ねらい：日野市は、自然共生型の暮らし、地域共生型の暮らしができるまちである。実際に、日野市の自然環境・生活環境を見て歩き、そのことで、これからの「よりよいまちづくり」を考えるきっかけとする。
- ・内容：日野市の市民主体のまちづくり活動の中から生まれた「マップ」で紹介された「わくわく」「まったり」ポイントを歩くまちあるきルートを構成。大人（市民）が考えた「わくわく」「まったり」ポイントを、若者目線で観察し、主観的・客観的データを、マップに重ね、市民への提言を行う。

## 2.サマーキャンプ後の展開 ～市民の活動との融合～

日野市にも協力いただき、学生が開発した今回の高大連携プログラムにより若者の捉えた「まち」の印象を、市民にフィードバックする「市民のためのまちあるきツアー」を学生が企画・運営をした。高大連携により実施したプログラムの成果を、さらに現実社会につながることで、アクティブな学びをすすめた。

<日野市「二中地区アクションプラン 第4弾・実践女子大学生企画ツアー」>

■実施日：2018年1月13日（土）

10：00 豊田駅南口階段下集合 14：00 日野市立カワセミハウス解散

■内容：大学生がルート設定し、高大連携プログラムで実施したまちあるき手法を活かし、地域の魅力発見「おすすめスポット」を市民とともに歩き、その中で、若者の視点をフィードバックする。市民の皆さんにも、いくつかの調査票を用いて、地域の姿に目を留めていただく。まちあるき後、振り返りにより、世代の思いを交流し、地域のことを考える機会とする。

### 【成果】

#### 1. 参加した大学生の学修効果

サマーキャンププログラム終了直後に、参加学生に「振り返りシート」を記入してもらった。観点としては、「動機づけはきちんとなされていたか」「目標を自覚し、そのための方向性とシークエンスを構築し、リスクを回避して実践できたか」「自分自身の課題と向き合いながらプログラムの課題を行えたか」である。プログラム全体としては手応えを感じ、大学生の学びを高校生に伝えるという目的を達成したという感覚や、大学生自身の研究領域である地域の課題の発見や魅力の掘り下げに関する満足感は得られていた。一方、コミュニケーションの不足や、役割分担が不十分であったこと、時間管理などにはかなりストレスを感じていたことがうかがえる結果となった。チームメンバーの役割分担や対象とする高校生像の想定など、事前準備をしっかりとすることにより、アクティブ・ラーニングとしての達成感の向上もさらにすすむことが示唆され、今後の指導の視点を得ることができた。

#### 2. 高大連携によるまちづくりプログラムの開発

若者に「地域の暮らし」にどのように関心をもってもらうか。社会学部の学生（江戸川大学）と生活科学部の学生（実践女子大学）の連携により、「SD法」「インタビュー法」「行動観察法」の3つの調査法を組み合わせるまちあるきをし、若者ならではのまちづくりの視点を提案する、というプログラムを考案した。このプログラムは、若者にとって、知らないまちの暮らしや人の思いに関心を寄せるきっかけを作った。さらに、若者の視点を市民にフィ

ードバックすることにより、ティーンエイジャーと大人をつなぐことができ、興味深い市民の方からの応答が得られた。地域の暮らしへの問題意識が高いとは言えない若年層に、地域と暮らしに目を向け、これからの地域社会づくりを考えるきっかけを与えるプログラムとして発展させる可能性が示唆された。

#### ⑤ 研究成果の発表・活用（学会発表・論文掲載・地域連携・産学連携など）

- ・論文：土屋薫・須賀由紀子「若者による地域の『見どころ』把握に関する基礎的研究—高大連携プログラムを通じた日野市豊田地区における事例—」（江戸川大学紀要第28号、2018）
- ・学会発表：須賀由紀子・土屋薫「高大連携によるまちづくり提案の試み～よりよい地域社会づくりのために～」（日本レジャーレクリエーション学会第47回学会大会発表、2018）

#### ⑥ 今後の展開・継続性について

少子高齢化、長寿化、核家族化、女性の社会進出に伴う生活スタイルの変化等を背景に、これからの暮らしの受け皿として、「地域自立社会」を構築していくことは、重要な地域課題と考えられる。そのためには、地域づくりに主体的に参画する市民意識を醸成し、地域を支える社会関係資本をいかに持続的に創り出していくかが大切である。

今回の高大連携プログラムを通して、参加した若者は短時間のうちにまちを見る視点を得、「住んだら楽しそう」「自然もお店もいろいろあって、地域の人の思いを感じる場所」「生活するのによさそう」といった印象を記しており、暮らしやすさや生活環境を向けることができている。また、それぞれの地点での「よいところ」「改善点」について、的確に示し、地域住民に役立つ視点を提供した。このことから、今回のまちあるきのプログラムは、地域に内在する多様な価値に気づき、誰もがまちに愛着を持ち、考える主体者となるためのきっかけのプログラムとしての可能性があり、これを標準化し、発展させていくことは、社会的意義が高いと考えられる。今後の展開として、今年度の研究を経て、大学生自身が自らの学びをもとに開発したこの方法論を、別の対象者にも適応して成果を確かめ、「誰でも、どこでも、誰とでも」行えるプログラムに標準化し、多世代が交流してまちづくりの主体者となるためのプログラムへと発展させていきたいと考える。